

序 両大戦間期フランスの表象

——女性、戦争、植民地

澤田直

本書は、二〇二四年七月二十、二十一日に日仏会館で行われた創立百周年記念の日仏シンポジウム「両大戦間期フランスの表象——女性、戦争、植民地」の記録論集である。その趣旨と背景を簡単に記すことにしたい。

シンポジウムの発端

日仏会館が設立された一九二四年は、第一次世界大戦後の復興も軌道に乗り、フランスに活気が戻ってきた時期である。パリ・オリンピックが開催され、シュルレアリスムが誕生した年でもあり、前衛芸術が展開した時代というイメージがある。じつさい、「狂乱の時代」とも呼ばれる一九二〇年代は、アールデコや優美なファッションによって日本でもよく知られ、すでに多くの研究もなされている。それに続く三〇年代も、世界恐慌こそ起こったものの、文学、美術、音楽、服飾の分野で多くの傑作が生まれたこともあり、第二次世界大戦が勃発するまでのいわゆる両大戦間期は全体としてたいへん華やかな印象があるだろう。だが、それ相応の暗い側面や知ら

れざる側面もあり、そういった面を浮き彫りにし、この時代に少し異なる角度からアプローチしてみたいと考えた私は、以前に一つのシンポジウムを企画したことがある。それが、二〇一六年十月二十九日、三十日の二日にわたって日仏会館で行われた国際シンポジウム、「芸術照応の魅惑Ⅱ 両大戦間期のパリ——シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化」である。高級文化の影に隠れがちな大衆文化に焦点を当て、写真、緑日、ナイトクラブを取り上げたほか、一九三一年にパリで行われた国際植民地博覧会とシュルレアリスムの関係、さらにはカール・アインシュタインによる黒人芸術論やジョセフィン・ベイカー現象などの黒人文化への関心の高まりについて各界の専門家の方に論じていただいた。記録論集は『異貌のパリ 1919-1939——シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化』として水声社から刊行された。

こうして、当時のサブカルチャーに関してながしかの光をあてることができたと自負しているが、映画について言及できなかったことが心残りだった。そこで、今回その続篇を企画するにあたって野崎歓さんに全面的にご協力を仰ぎ、当時の重要な娯楽であり、大きな転換期を迎えていた映画に関するセッションを設けた。また、前回のシンポジウムでもう少し掘り下げるべきだったと思ったのが、戦争の問題、さらには当時の女性たちの活躍ぶりである。かくして、芸術や文化を担った女性たちに光をあけるとともに、その背景にある戦争と植民地についてでも取り上げようという少し欲張りな構想がまとまった。タイトルには「女性」が含まれるが、狭義の女性に留まらず、ジェンダー・ノンコンフォーミングも射程に収められる。

近年、この時代の女性芸術家たちへの関心が高まっていることは、二〇二二年にパリのリュクサンブール美術館で行われた展覧会「先駆者たち——狂乱の時代のパリの女性芸術家¹⁾」や二〇二三年にモンマルトル美術館で開催された「シュルレアリスムの女性形²⁾」展、さらにそれに先立つ一九九八年にパリで開催された「フランスの新しいヴィジョンの女性写真家 一九二〇——一九四〇」などからも窺える³⁾。

女性たちのフランス

一九二〇年代、三〇年代のフランスで活躍した女性芸術家と言えば、ソニア・ドローネー、マリー・ローランサン、キキ・ド・モンパルナス、タマラ・ド・レンピツカなどがすぐさま思いつくだろうし、シュルレアリスム関係では、ヴァランティーンヌ・ユゴー、英国出身のレオノーラ・キャリントン、スペイン出身のレメディオス・バロなどの名前も浮かぶ。

今回の論集のテーマである植民地との関係では、アフリカを描いたアンナ・カンコー⁴やアジアに題材を取ったマリー・アントワネット・ブヤール⁵ドゥヴェなども紹介されるべきアーティストだろう⁵。二人の作品を単なるエキゾチシズムの結果と考えるべきなのか、深い共感の表れと見るべきなのかについては、議論の余地もあるが、研究対象として魅力的な芸術家が目白押しなのは、当時の状況と密接に関わっている。

女性芸術家たちの活躍の背景には、一九三〇年にマリー・アンヌ・カマックス⁶ゾエガーらが設立した現代女性芸術家協会による定期的な展覧会という体制の確立もある。また、特筆すべき出来事としては、一九三七年二月にジュ・ド・ポーム美術館で開催された女性芸術家たちの作品のみを集めた展覧会がある。ヨーロッパの十五カ国から百人以上のアーティストの五五〇ほどの作品が出品されたこの展覧会は、女性芸術家たちの躍進を如実に表す例⁶だ。

この時代に女性芸術家が数多く輩出したのは偶然ではない。一九一四年から一八年まで続いた第一次世界大戦は人類史上未曾有の戦争であった。ドイツとオーストリア⁷ハンガリー帝国を主力とする同盟国と、フランス・イギリス・ロシアなどの連合国が死闘を繰り広げ、英仏の植民地の人びとも動員され、文字通り世界を巻き込んだ初めての戦争となっただけでなく、航空機、毒ガス、戦車、機関銃、潜水艦といった最新の軍事テクノロジー

による大量殺戮の場となった。その結果、戦闘員のみならず、民間人を含む多くの戦死者や負傷者が出た。フランスでは戦没者が約一七〇万人とも言われる。当時の人口が約三九六〇万人とされるから、その影響には計り知れないものがあつた。続く時代の女性進出にはこの大戦が大いに関係している。

第一次世界大戦によって、私たちは青年壯年を問わず前線に駆り出され、経済・社会活動の多くが女性たちによつて担われるようになった。それに伴い女性たちの服装に大きな変化が起こる。これこそココ・シャネルによるファッション革命であつたことは周知の通りである。ただし、これはよく知られた一例にすぎない。一九二〇年代のフランスでは芸術、文学、道徳、モード、生活様式などあらゆる面で、それまで抑圧されてきた女性の力が噴き出した。芸術の例は後に見るが、それ以外の分野では、たとえば女性飛行士の活躍がある。アドリエンヌ・ポーランは、一九一九年にコードロン飛行学校で訓練を受けた後、一九二〇年八月、女性としては二人目となるドーバー海峡横断飛行を行った後、一九二一年四月には、旧式の軍用複葉偵察機コードロンG3でアルゼンチンのメンドーサからチリのサンチャゴまで三時間十五分かけて飛行、標高四五〇〇メートルのアンデス山脈を越えた最初のパイロットになるという快挙を果たした。

このような女性進出の状況を象徴するのが、伝統的な生き方のみならず、従来の性愛規範にも抵抗し、新しい女性のイメージを大胆に提示した「ギャルソヌ (*garçonne*)」と呼ばれる女性たちだ。ギャルソヌとは *garçon* (少年) の女性形。既存の社会規範や倫理観に囚われずに行動する女性は十九世紀にも存在したし、すでに女性作家コレットが『さすらいの女』や『シェリ』で社会通念に抗して自由に振る舞う女性たちを描いていた。それが一大社会現象になるのが一九二〇年代である。きっかけとなつたのは、一九二二年に刊行された、ヴィクトル・マルグリットの手によるその名も『ギャルソヌ』という一世を風靡した小説。ギャルソヌは解放された女性の代名詞となる。外観から言えば、膝丈の短いスカートやショートヘアのボブカット、濃いメイクアップ、ときにはネクタイなどの男装も取り入れ、生活様式としては、ジャズや、飲酒、喫煙、ドライブ、水浴を楽しむ、

自由な性交渉、ときに同性愛にひたる女性たち⁸⁾、端的に言えば、伝統的に女性に求められてきた社会的・性的規範に抗った女性たちを示す。その影響力にはたいへんなものがあつた。

たとえば、このフアッションと風潮が、思春期のシモーヌ・ド・ボーヴォワールに大きな影響を与えたことは間違いない。後に自殺する親友のザザことエリザベト・ラコワンがブローニーの森で撮った写真（一九二八年）があるが、エリザベトの妹ジェルメーンも右端のボーヴォワールも、ブルジョワ女性の服装ではなく、ギャルソンの装いだ。戦後、ボーヴォワールはフランスで初めてのフェミニズムの理論書『第二の性』（一九四九年）を発表するが、そこで展開される自律した女性や同性愛の女性に関する記述は一九二〇年代の社会状況を抜きにしては十全には理解できないだろう。

選挙権も持たず、法律的にはあいかわらず家父長の支配下にあつたとしても、十九世紀とは異なる精神が女性たちを導いていた。また、多くの外国人女性も、女の都パリを目指してやってきたことは、グレタ・シラー監督の映画『パリは女』（一九九六年）が描くとおりだ⁹⁾。ガートルード・スタイン、ジャネット・フラナー、ナタリー・バーニー、ジュリー・バーンズ、ナンシー・キユナードらが闊歩する左岸では何かが確実に変わりつつあつた。

植民地と黒人世界

この時代、植民地との関わりにも変化が見られる。その最たるものは一九三一年にパリで行われた国際植民地博覧会であるが、『ヴユ(Vue)』などのグラビア雑誌も、植民地特集を組み、その情景は写真によって一般人にとっても身近なものになった。また、第一次世界大戦では、植民地からも多くの人員が徴発され、その数は兵士・労働者あわせて六十万人以上と言われる¹⁰⁾。ヨーロッパ戦線に投入されたセネガル兵をはじめとするブラッ

ク・アフリカ各地出身の黒人兵の数は十八万人にのぼる^①。アフリカだけではなく、カリブ海からも多くの人が動員され、戦後はフランス本土にも多くが住みつくことになった。二〇二三年に出版されたマルティニックの作家ラファエル・コンフィアンの小説『プロメ街の舞踏会^②』はまさにそういった動員兵あがりのマルティニック人を主人公にしている。モンパルナス地区のプロメ通り三三番地に一九二四年にオープンしたナイトクラブ「バル・ネーグル」はジョセフィン・ベイカー、モーリス・シュヴァリエ、ミスタンゲッツといったショービズ関係者はもちろんのこと、ヘミングウェイをはじめとするアメリカ人、藤田嗣治やコクトーらの流行児が通ったことで知られ、絵の題材ともなっている。コンフィアンは、このように白人芸術家の文脈で語られてきたバル・ネーグルを、十分な恩賞ももらえず、パリで工員として働くことになった元兵隊の黒人の視線から語り直している。これまで見られる対象でしかなかった黒人が主体となり、その視点から、ビギンの聖地とも言うべきナイトクラブの神話的世界が描かれる点で興味深い。

パリにやってきた植民地からの若者のなかには文学的野心を持つものも少なくなかった。象徴的な出来事として、マルティニック出身のルネ・マランが一九二一年に『バトゥアラ 真の黒人小説』でゴンクール賞を受賞したことを挙げることができる^③。中央アフリカの自然と現地民の暮らしや心理を描くこの小説はフランス語による黒人文学の先駆的作品とされるが、その背景には一九二〇年代初めにフランスを席卷した黒人愛好(nérophilie)の現象があることは、本人が序文で述べているとおりだ。『異貌のパリ 1919-1939——シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化』では、黒人礼賛現象のなかで美術、音楽、ダンスを見たが、文学を取り上げるこ

とができなかつたので、今回はこの分野にも触れることにした。

以下、収録論文の内容を簡単に紹介したい。

黒人世界・植民地・戦争

このセクションに収めたのは黒人による文学、黒人表象に関わるテキスト、植民地や戦争との関わりによる美術の変容を扱う三つの論考である。

ドミニク・ベルテの『黒人世界評論』と『正当防衛』——意識を目覚めさせる二つの武器としての雑誌』は、マルティニック出身者による二つの雑誌を例に取り、当時のフランスにおける植民地出身者の活動を概観する。ポーレット・ナルダルらによる『黒人世界評論』は、黒人の作家、音楽家、詩人、学生、政治家、哲学者、芸術家たちのネットワークを築き、黒人意識を構築することを目指した雑誌である。『正当防衛』は、マルティニック県議会の奨学金を得て渡仏したルネ・メニル、ジュール・モヌロ、テリユス・レロ、エティエンヌ・レロ、オーギュスト・レロらによるもの。彼らの活動がネグリチユードを準備したことを指摘している。

中村隆之「人種主義と帝国主義に抗して——ナンシー・キュナードの『ニグロ・アンソロジー』（一九三四年）」は、英国出身でパリを拠点に活動したナンシー・キュナードの政治的・文化的仕事を通して、「黒人表象」の展開を考察する。当時の「黒人問題」の歴史的文脈を再構成しながら、キュナードが一九三四年に出版した大著『ニグロ・アンソロジー』の内容をつぶさに分析しつつ、その独自性を剔出している。

大久保恭子「アンリ・マティスとプリミティヴィスムの変容」は植民地と美術の関係を巨匠マティスの例をとおして解明する。穏やかな自然主義の様式にシフトして国家からフランス的な画家としての承認を得たマティスの作品を、アール・ネーグルの「発見」に始まるプリミティヴィスムの大戦間期の展開と変容の視点から見ると、そこに植民地の訓致が読みとれるという。論者はこの点を当時の社会状況を参照しながら、具体的な作品を分析することで明らかにしている。

美術と文学の女性たち

このセクションには、美術や文学の分野で活躍した女性たちや、戦争と関係した文学作品における女性像に関する論考四本を収めた。

永井敦子「一九三〇年代のシュルレアリスムとクロード・カーアンのアンガー・ジュマン」は、ジェンダー問題を先駆的に問うた特異なセルフ・ポートレート写真で知られる女性芸術家カーアンのシュルレアリスム運動との関わりを扱う。「革命的作家芸術家協会」や「コントロール・アタック」に参加するかたわら、パリやロンドンでのシュルレアリスム展にも参加したカーアンのアンガー・ジュマンの動機と活動形態がつぶさに分析される。

澤田直「女性写真家と作家たち——ジゼル・フロイントを中心に」は、当時のほとんどすべての作家を撮影したドイツ人女性写真家ジゼル・フロイントを取り上げる。彼女のカラー写真によるポートレートを概観することによって文壇の裏側にあるネットワークをあぶり出すとともに、アドリエンヌ・モニエ、シルヴィア・ビーチ、ヴァルター・ベンヤミンなどとの交流も提示する。

ジゼル・サピロ「戦時下における看護婦、炊事婦、女性戦闘員の文学表象——デュアメル、セリーヌからエルザ・トリオレまで」は、戦争によって女性表象が変化する過程を三つの小説作品の分析を通して行う。当時の一般的なジェンダー区分によれば、男性には権力、生産性、行動、勇敢さ、英雄主義^{ヒーロイイズム}を担うことが、女性には再生産^{レプロダクション}、看護、憐憫、男性の性的欲求を満たすことが割り振られていた。ところが、戦争によって男性が負傷し、男性性を失うことで、支配関係の逆転が生じ、新たな女性像が生まれることが指摘される。

小川美登里「マルグリット・デュラスにおける想起、記憶喪失、そして忘却」は、一九一四年に仏領インドシナで生まれ、十九歳で祖国に來たデュラスの例を取り上げ、女性、戦争、記憶、生き残り、マイノリティなどの

テーマを、『苦惱』、『かくも長き不在』、『ヒロシマ・モナムール』（小説と映画のシナリオ）を通して解析。戦争が不可避免的に引き起こす記憶との困難な関係の問題を、デュラスが生き証人の傷を通して「語り得ないもの」として事後的に描いたことの意味が明らかにされる。

イメージの戦い

最後のセクションには、映画を中心に女性、戦争、植民地の問題がどのように表象され、描かれたのかを扱う論考四本を収めた。

ロラン・ヴェレー「一九三〇年代末のフランス映画における第一次大戦——女性表象の映画的特徴と社会的問題」では、レーモン・ベルナル監督『フランスに奉仕するマルト・リシャル』（一九三七年）、ジャン・ルノワール監督『大いなる幻影』（一九三七年）、アベル・ガンズ監督『失われた楽園』（一九三九年）が組上に載せられ、女性登場人物と、それを演じる女優たちの演技の分析を通して、フランス映画が第一次世界大戦の知覚的記憶の新たな解釈をどのように、またなぜ提起したのが解き明かされる。

本書は、フランスに留まらず、それを日本とも関わらせることでより立体的に考察する論文も収録している。大久保清朗の「アノニムな美德——アンドレ・バザンの日本映画評を通して見出される「天才」の概念^{ジュエニ}」は、一九五二年の『羅生門』評から亡くなる一九五八年まで日本映画の「独特の特質」を積極的に評価してきた映画評論家アンドレ・バザンを取り上げる。イタリアの「ネオレアリズモ」との共通性を見出す同時代の批評やトリュフォアの「作家主義」とは距離を取ったバザンの日本映画解釈を通して、日本映画の戦争表象がフランスでどのように受容されたかが検討される。

木下千花の「水木洋子のインドシナ——『浮雲』（一九五五年）再考」は、日本映画第二の黄金時代の名作、

成瀬巳喜男監督の『浮雲』を取り上げ、林芙美子の原作との関係などから論じられてきたこの作品を、脚本家・水木洋子を通して捉え直す。第二次大戦下の日本の植民地・占領地における女性知識人という視点から、植民地的状況における権力関係とジェンダー、さらには映画における「脚本」の役割が論じられる。

掉尾を飾るのは、映画における軍服の役割を分析した野崎敏「戦争にあらがうフランス映画——軍服の表象をめぐって」。通常、軍服は「敵」と「味方」の識別の根本要素であり、愛国主義を鼓舞する要素として機能する。ところが、ジャン・ルノワール、マルセル・カルネ、ジャン・ピエール・メルヴィルの作品では、軍服はそのようなクリシエとはまったく異なる仕方で見られる。そこにフランス映画に底流する戦争にあらがう態度が見て取れると著者は考察する。

以上の十一本の論考を通して、この時代の女性、戦争、植民地について、わずかなりとも新たな知見をもたらすことができるのであれば、発表者一同にとって喜ばしい限りである。

なお、シンポジウムの際には戦争と反戦をテーマにしたミニコンサートが行われたことも付記しておく。詳細は巻末のプログラムをご覧ください。

*

本シンポジウムの企画の段階から出版にいたるまで、お世話になった方や団体は数多い。

とりわけ、公益財団法人石橋財団の寛大な助成なくしては、フランスからの研究者の招聘はもとより、本書の刊行も不可能であった。ここに記して満腔の謝意を表したい。

公益財団法人日仏会館の中地義和副理事長には企画の段階からさまざまご助言をいただき、事務局には運営

に関して入念に対応していただいた。日仏会館・フランス日本研究所のトマ・ガルサン所長からもご支援をいただいた。関係者各位に心より感謝申し上げます。

共同企画者である野崎歓さんにもこの場を借りてあらためて感謝します。野崎氏の文学と映画に関する幅広い知見のおかげで、本シンポジウムの構成には厚みが出ました。

末筆になるが、企画の段階から校正にいたるまで、たいへん細やかな配慮をしてくださった水声社の廣瀬覚氏と福井有人氏に厚く御礼を申し上げます。

それでは、みなさま、両大戦間期のフランスの世界をお楽しみください。

【注】

- (1) Camille Morineau et Lucia Pesapane (dirs.), *Pionnières. Artistes dans le Paris des années folles*, sous la direction de Camille Morineau et Lucia Pesapane / Musée du Luxembourg, 2022.
- (2) Alix Agret et Dominique Paini (dirs.), *Surréalisme au féminin?*, In Fine éditions d'art / Musée de Montmartre, 2023.
- (3) Christian Bouqueret, *Les femmes photographes de la nouvelle vision en France 1920-1940*, Marval, 1998.
- (4) 黒人彫刻に深い関心と共感を生涯にわたって示したカンコーの女性像『フータ・ジャロン』は話題となり、雑誌『イリュストラシオン』の表紙を飾るまでになった(ちなみに彼女の母のテレーズ・カイヨー＝カンコーは、ロダンのもとでカミーユ・クローデルとともに学んだ彫刻家だった)。アンナ・カンコーは三十四歳のときローマ大賞の次席を得たが、ローマに行く代わりに西フランスに向かうという選択をするほどアフリカにのめり込んだ。以下の資料を参照。Marie-Joséphine Conchon, *Thérèse et Anna*

- Quinquaud, *La sculpture en partage*, Les Arts et Métiers Éditions, 2022. 味岡京子「女性彫刻家アンナ・カンコーによる植民地表象——女性・帝国・美術」、天野知香編『西洋近代の都市と芸術 第3巻 パリⅡ——近代の相克』竹林舎、二〇一五年、三〇四—三二六頁。
- (5) マリー・アントワネット・ブヤール・ドゥヴェは一九二二年のマルセイユの植民地博覧会の際に、インドシナの役者やダンサーの姿を想像で描いた作品を展示した。その後、仏領インドシナに暮らすことになり、その経験をもとにした作品が一九三二年の植民地博覧会で展示された。パステル画やグアッシュ、さらにリトグラフによってアジア人たちを活写している。
- (6) *Les Femmes artistes d'Europe exposent au Jeu de paume*, Musée du Jeu de Paume, février 1937.
- (7) コレットが一九二〇年にレジオン・ドヌール勲章を授与されたことは社会的な認知とも言える。
- (8) シヤネルやジャン・パトゥーなどのファッションがこの現象に寄与する部分も大きい。同性愛のテーマは、すでにブルーストの『失われた時を求めて』でも描かれていた。
- (9) その書籍化は邦訳されている。アンドレア・ワイス『パリは女——セーヌ左岸の肖像』伊藤明子訳、パンドラ／現代書館、一九九八年。
- (10) 平野千果子『アフリカを活用する——フランス植民地からみた第一次世界大戦』人文書院、二〇一四年。
- (11) 谷垣美有「植民地の軍事利用——第一次世界大戦期仏領西アフリカ連邦における援助と見返り」、『パブリック・ヒストリー』第一七号、大阪大学西洋史学会、二〇二〇年、二五—四一頁。
- (12) Rafael Confiant, *Le bal de la rue Blomet*, Mercure de France, 2023.
- (13) マランとその小説については、砂野幸穂「黒人文学の誕生——ルネ・マラン『バトゥアラ』の位置」、『フランス語フランス文学研究』第六三巻、日本フランス語フランス文学会、一九九三年、六九—八一頁に詳しい。